



Title	シネヘン・ブリヤート語の「形動詞」
Author(s)	山越, 康裕
Citation	北方人文研究, 5, 95-111
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/49284">http://hdl.handle.net/2115/49284</a>
Type	bulletin (article)
File Information	07journal05-yamakoshi.pdf



[Instructions for use](#)

## シネヘン・ブリヤート語の「形動詞」

山越康裕  
札幌学院大学

### 1. はじめに

モンゴル系言語を記述する際、多くは伝統的な分類方法をもとに動詞の屈折をいくつかのカテゴリーに分類する。そのカテゴリーとは、「定動詞 (finite form; このうちの希求法を希求動詞として別に分類する場合もある)」「副動詞 (converb)」「形動詞 (participle または verbal noun)」と呼ばれる三つ (ないし四つ) である。「定動詞」はいわゆる文を終止する形式、「副動詞」は副詞節の述部となる形式、「形動詞」は形容詞的性質をもち、名詞修飾節を形成する形式とおおまかに説明される。

「定動詞」「副動詞」「形動詞」という分類方法は、ロシア語やアルタイ諸言語<sup>1</sup>の文法記述で用いられ、そのほか旧ソ連圏に分布する多くの言語の記述においても用いられる (一方で、それ以外の地域・語群では用いられない)<sup>2</sup>。この分類方法は、とくにアルタイ諸言語の記述においては概括的に動詞の語尾をとらえるのに適している反面、しばしば通言語的理解の妨げともなる。

モンゴル語の動詞屈折におけるこの分類をとくに共時的に観察すると、「形動詞」「副動詞」等に分類される接辞の形態統語的機能が一律ではないことがわかる。また、先行記述をみても、どの接尾辞をどの分類に含めるべきかという点でゆれがみられる。

そこで本稿では、シネヘン・ブリヤート語<sup>3</sup>の「形動詞接尾辞」とされる接尾辞について、その用法・特徴を確認し、以下の2点を指摘する。

A. Malchukov (2006) の示す「脱範疇化／再範疇化」の階層を適用し、屈折と派生の中間的位置にある接尾辞も従来の「形動詞」に含まれている。

B. いわゆる「形動詞」の典型的用法 (名詞修飾用法・名詞句用法・叙述用法) から外れる

---

\* 本稿は2011年12月17日に開催された、池上二良先生追悼シンポジウム (北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター主催、於 北海道大学) にて同題目にて発表した内容に加筆・修正したものである。内容は、平成22~24年度日本学術振興会科学研究費補助金 (若手研究 (B)) 「モンゴル系危機言語であるシネヘン・ブリヤート語の総合的記述」 (#22720163) の助成を受け、平成22年夏季および23年春季に中国内蒙古自治区呼倫貝爾 (フルンボイル) 市鄂温克 (エウエンキ) 族自治旗錫尼河蘇木 (シネヘン村) にて、および平成23年夏季に千葉市にて実施した調査にもとづいている。言語コンサルタントとして母語話者である道恩徳格 (ドンドク) 氏 (40代男性)、特木其勒 (テムセル) 氏 (40代男性) をはじめとするシネヘン村在住の方々および同じく母語話者である奥山朋子氏 (60代女性) にご協力いただいた。また、江畑冬生氏からは、サハ語にかんしていくつかの有益なコメントをいただいた。ここに改めて感謝の意を表したい。

<sup>1</sup> 亀井・河野・千野編 (1996: 1142) によれば、副動詞 (converb) はフィンランドのアルタイ語学者ラムステッド (G. Ramstedt) のつくった用語であるという。

<sup>2</sup> アルタイ諸語にかんしては、たとえば Ikegami (1956) によるウイグル語、風間 (2003a) におけるエウエン語、Ebata (2011) によるサハ語、Yamakoshi (2011) によるシネヘン・ブリヤート語など、日本人研究者もこの分類に沿って動詞形態法を記述するケースがほとんどといていい。アルタイ諸語以外でも、たとえば Nagasaki (2011) によるユカギール語のように、旧ソ連圏の「アルタイ型」 (亀井・河野・千野 1996: 28-29) の言語の記述において用いられている。

<sup>3</sup> シネヘン・ブリヤート語は中国内蒙古自治区呼倫貝爾市鄂温克族自治旗錫尼河蘇木を中心に居住するブリヤートおよびハムニガンの人々、約6,000人によって使用される。系統的にはモンゴル語族に属するブリヤート語の下位方言という位置づけである。基本語順はS-O-V、Dependent-Headとなっており、従属節が主節に先行する。従属節内部の語順もS-O-Vである。名詞の格変化や動詞の屈折は接尾辞によってあらわされる、典型的な「アルタイ型」言語である。音韻・文法概要はYamakoshi (2011) を参照されたい。

接尾辞もあり、「定動詞」「副動詞」を含めた三つの屈折カテゴリーを認めるという従前の記述が妥当かどうか考える必要がある。

## 2. シネヘン・ブリヤート語の動詞屈折

シネヘン・ブリヤート語の動詞は、動詞語幹に屈折接尾辞をとまなうことで屈折する。ただしヴォイスは新たな語幹を派生する派生接尾辞に分類されるのが一般的である。また、屈折接尾辞のあとに人称・数を標示する小詞（もしくは再帰人称接尾辞）が続く場合がある。

### (1) 【動詞語幹(-VOICE/ASPECT)]<sub>STEM</sub>-屈折接辞(=PERS)

[jab-ool-s'ix<sup>j</sup>]-ɔɔ=s<sup>j</sup>.<sup>4</sup>

[行く -CAUS-PFV]-K.IPFV=2SG

「(お前は誰かを) 行かせてしまった」

動詞の屈折は、第1節で述べたように三つのカテゴリーに分類される。すなわち、文末で叙述をおこなう「定動詞」(2)、従属節の形成など、述語動詞を修飾する機能を持つ「副動詞」(3)そして名詞修飾をおこなう「形動詞」である(4)。なお、「形動詞」は文中で名詞句として機能することも(5)、文末で用いられることもある(6)。それぞれの用例を以下に示す。

### (2) 定動詞：叙述用法

bii id<sup>j</sup>-ne=b<sup>j</sup>.

1SG:NOM 食べる-PRS=1SG

「おれが食べる」[FN]

### (3) 副動詞：動詞修飾用法

tab xaxad-aar az<sup>j</sup>al boo-g-aad ger-t-ee xur-xe=b<sup>j</sup>.

5 半分-INS 仕事 下りる-E-C.PFV 家-DAT-REFL 至る-K.FUT=1SG

「5時半に仕事を終えて帰宅する予定です」[山越 2006: 166]

### (4) 形動詞：名詞修飾用法

bii [malz<sup>j</sup>a-xa ɔɔn] ɔs<sup>j</sup>-xɔ-j-ɔɔ s<sup>j</sup>iid-ee=b<sup>j</sup>.

1SG:NOM 牧畜する-K.FUT 地域 着く-K.FUT-ACC-REFL 決める-K.IPFV=1SG

「私は牧区(牧畜用の土地)に行くことに決めました」[山越 2006: 161]

### (5) 形動詞：名詞句用法

[tam<sup>j</sup>x'a tat-xa]=s<sup>j</sup>ni bijen-de=s<sup>j</sup> moo.

タバコ 引く-K.FUT=2SG:POSS 体-DAT=2SG:POSS 悪い

「タバコを吸うのは(君の)体に悪い」[山越 2006: 156]

<sup>4</sup> 以下、例文に出典がないものは作例である。また発表者以外の文献によるものは母語話者のチェックを受けている。[UnP]は録音資料のうち未公表となっている例、[FN]は日常会話において例文を採集し、フィールドノートに記載している例を示す。なお、グロス(逐語訳)の文法用語略号は原則として Leipzig Glossing Rules (Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology)に依拠しているが、本稿で問題とする「形動詞」については、participle とみるべきか、verbal noun とみるべきかという問題が未解決のため、ひとまず K と表記する。

(6) 形動詞：叙述用法

tede usegelder oroi tereen-de apiraas x-ee.  
 3PL:NOM 昨日 晩 3SG-DAT 手術:INDF する-K.IPFV  
 「彼らは昨晚、彼の手術を（担当）しました」[山越 2006: 156]

以上三つの屈折カテゴリーの用法をまとめると、表 1 のようになる。

	「定動詞」		「副動詞」	「形動詞」
	直説法	希求法		
叙述用法	○	○	×	○
名詞修飾用法	×	×	×	○
名詞句用法	×	×	?	○
動詞修飾用法	×	×	○	?

表 1. 用法の分布（「？」については 4 節にて後述する）

ちなみに、形動詞の用法は、形容詞の用法によく似ている。モンゴル諸語の形容詞は名詞との形態的差異がほとんどなく、形容詞がそのまま名詞的に用いられる。つまり、形容詞にも名詞修飾用法・名詞句用法・叙述用法の三つが備わっている (7)-(9)。

(7) 形容詞：名詞修飾用法

tere [olaan istuul]-ii asar.  
 その [赤い イス]-ACC 持ってくる(2SG:OPT)  
 「その赤いイスを持ってこい」

(8) 形容詞：名詞句用法

olaan-ii=n ab-jaa.  
 赤い-ACC=3:POSS 取る-1:OPT  
 「その赤いのをもらおう」

(9) 形容詞：叙述用法

tereen-ei mas<sup>l</sup>iin=in olaan.  
 それ-GEN 自動車=3:POSS 赤い  
 「あいつの車は赤色だ」

ただし、形容詞と「形動詞」の間には形態法上いくつかの違いがある。その一つが、否定接尾辞 -gui を接続できるかどうかという点である。形容詞は否定接尾辞を接続することができないが、「形動詞」は接続可能となっている (10)。

(10) 形容詞と「形動詞」の形態的差異（否定接尾辞-gui の接続可否）

\*olaan-gui vs. id<sup>l</sup>-xe-gui id<sup>l</sup>-ee-gui  
 赤い-NEG 食べる-K.FUT-NEG 食べる-K.IPFV-NEG

なお、シネヘン・ブリヤート語と形態・統語面が共通しているブリヤート語ホリ方言を対

象とした先行記述では、「形動詞」を形成する接尾辞として次の表2に示す接尾辞があげられている。

	名称	「形動詞」接尾辞の種類
Poppe (1960)	verbal noun	-han <sub>3</sub> 完了 <sup>5</sup> ; -aa <sub>4</sub> 不完了; -xa <sub>3</sub> 未来; -dag <sub>3</sub> 習慣; -gs <sup>i</sup> a <sub>3</sub> 行為者1; -aas <sup>i</sup> a <sub>4</sub> 行為者2; -aŋxai <sub>3</sub> 遠過去; -aatai <sub>4</sub> 受動
栗林 (1992)	形動詞	-han <sub>3</sub> 完了; -aa <sub>4</sub> 現在完了; -xa <sub>3</sub> 予定; -dag <sub>3</sub> 習慣; -gs <sup>i</sup> a <sub>3</sub> ~ -aas <sup>i</sup> a <sub>4</sub> 行為者; -aŋxai <sub>3</sub> 過去完了
Darbeevea (1997)	Rus. prichastie	-han <sub>3</sub> 完了; -aa <sub>3</sub> 不完了; -xa <sub>3</sub> 未来; -dag <sub>3</sub> 習慣; -gs <sup>i</sup> a <sub>3</sub> 行為者1; -aas <sup>i</sup> a <sub>4</sub> 行為者2; -aŋxai <sub>3</sub> 結果; -aatai <sub>4</sub> 受動; -maar <sub>4</sub> 可能性
Skribnik (2003)	participle	-han <sub>3</sub> 完了; -aa <sub>4</sub> 不完了; -xa <sub>3</sub> 未来; -dag <sub>3</sub> 習慣; -gs <sup>i</sup> a <sub>3</sub> 行為者1 / -aas <sup>i</sup> a <sub>4</sub> 行為者2; -aŋxai <sub>3</sub> 結果; -aatai <sub>4</sub> 受動; -xaar <sub>4</sub> 可能性; -maar <sub>4</sub> 適切性

表2. 先行研究における「形動詞」

表2をみると -han<sub>3</sub>; -aa<sub>4</sub>; -xa<sub>3</sub>; -dag<sub>3</sub>; -gs<sup>i</sup>a<sub>3</sub>; -aas<sup>i</sup>a<sub>4</sub>; -aŋxai<sub>3</sub> の7種の接尾辞は、ひとまずつどの先行記述においても「形動詞」と分類されていることがわかる。ただし、先の4種の接尾辞 (-han<sub>3</sub>; -aa<sub>4</sub>; -xa<sub>3</sub>; -dag<sub>3</sub>) に比べ、残りの3種および一部先行記述において「形動詞」とされる各接尾辞とは、機能・用法の点で若干異なる。そこで、2節では先の4種を「典型的形動詞」とし、「典型的形動詞」と他の「形動詞」とがどう異なるのかを検証していく。

### 3. 派生との区別：品詞転換における脱範疇化と再範疇化

まず、「典型的形動詞」とその他の「形動詞」との機能的差異を確認するため、Malchukov (2006) の示す「脱範疇化 (decategorization)」と「再範疇化 (recategorization)」の階層を用いる。Malchukov (2006) は、品詞が変わる際には、もとの品詞の文法範疇の特徴を失う「脱範疇化」と、新たな品詞の文法範疇の特徴を獲得する「再範疇化」とが相互に独立しておこなわれるとし、とくに動詞の名詞化に際しては、脱範疇化と再範疇化について、機能面における以下の階層性が存在すると指摘している。

動詞の脱範疇化            -Valency >> -Voice >> -Aspect (>> -Tense) >> -Mood >> -AGR >> -IF<sup>6</sup>  
 名詞への再範疇化        -Case (>> -Det) >> -Pos >> -NB (>> -CL)<sup>7</sup>

(Malchukov 2006 を一部改訂)

脱範疇化については、階層右側から順にその機能を失い、再範疇化については左側から順に機能を獲得するということになる。つまり、いずれも階層右側の機能を保持していると「動詞性」「名詞性」が強いということになる。

この階層に即して考えると、シネヘン・ブリヤート語の「典型的形動詞」は (11) のよう

<sup>5</sup> シネヘン・ブリヤート語は近隣のモンゴル諸語と同じく、「母音調和」があり、語根の母音に応じて拘束形態素の母音が交替する。母音調和による交替形 (異形態) の数を下付き数字で示す。以降提示する他のアルタイ諸言語の形態素についても (特別な事情のないかぎり) 同様に示す。

<sup>6</sup> AGR = Subject agreement, IF = illocutionary force marker (例えば「疑問」「命令」など聞き手にはたらきかける機能が保持されているかどうか) をあらわす。なおシネヘン・ブリヤート語の「形動詞」は Tense の標示がないため、Tense についてはカッコつきで示す。

<sup>7</sup> それぞれ Det = determiner, Pos = possession, NB = number, CL = classifier をあらわす。ただしシネヘン・ブリヤート語には限定詞・名詞クラスの標示はないため、Det および CL をカッコつきで示す。

に脱動詞化と名詞化の度合いを示すことができる。

- (11) **-Valency >> -Voice >> -Aspect (>> -Tense) >> -Mood >> -AGR >> -IF**  
 典型的形動詞 ----->  
**-Case (>> -Det) >> -Pos >> -NB (>> -CL)**  
 典型的形動詞 ----->

- (12) jab-s<sup>j</sup>-oo. (**+Aspect**)  
 行く-PFV-K.IPFV  
 「行ってしまった (こと)」

- (13) id<sup>j</sup>eel-uul-deg-gui=s<sup>j</sup> moo. (**+Voice/+Mood/+AGR**)  
 食事する-CAUS-K.HBT-NEG=2SG:POSS 悪い  
 「お前が (誰かに) 食事させないのが悪い」 [UnP]

- (14) ab-xa-jii=mni. (**+Case/+Poss**)  
 取る-K.FUT-ACC=1SG:POSS  
 「私の買う (も) のを」

「典型的形動詞」は、名詞的に用いられる名詞句用法・名詞修飾用法では疑問マーカ―やモダリティにかんするマーカ―を付与できない (**-IF**)。しかし、主語人称の標示 (**+AGR**)、否定接尾辞-gui の添加 (**+Mood**)、アスペクト (**+Aspect**) やヴォイス (**+Voice**) にかかわる接尾辞の挿入 (12)(13)、Valency の保持 (**+Valency**) (5) といった機能を残す。一方で、(14) のように格接尾辞 (**+Case**) や所有者を示す人称マーカ― (**+Pos**) を接続することができる。以上から、脱動詞化・名詞化については (11) のような状態といえる。

ちなみに、いわゆる派生接尾辞の脱動詞化・名詞化の度合いは (15) のように示される。

- (15) **-Valency >> -Voice >> -Aspect (>> -Tense) >> -Mood >> -AGR >> -IF**  
 派生接尾辞 -->  
**-Case (>> -Det) >> -Pos >> -NB (>> -CL)**  
 派生接尾辞 ----->

派生形容詞は、Malchukov (2006) が示す動詞の機能範疇のすべてが失われる。たとえば、-amxai<sub>3</sub> によって派生した出動形容詞 idemxei 「食いしん坊の」は、Valency などの機能を失っている反面、名詞としての機能を獲得し、(16) のように複数接尾辞を接続できるようになる (**+NB**)。

- (16) id<sup>j</sup>-emxei-nuud. (**+NB**)  
 食べる-V>A-PL  
 「食いしん坊たち」

では次に、その他の「形動詞」について確認する。なお、IF (Illocutionary Force) にかんしては共通して**-IF** のため、省略する。

### 3.1 -gs<sup>j</sup>a<sub>3</sub> 行為者 1 : (**-Asp**)

行為者「～する人」をあらわす-gs<sup>j</sup>a<sub>3</sub> は、アスペクトにかんする接辞を語幹に含むことができない (**-Aspect**)。その他の特徴とあわせると、脱動詞化・名詞化の度合いは (17) のように

あらわすことができる。

- (17) **-Valency >> -Voice >> -Aspect (>> -Tense) >> -Mood >> -AGR >> -IF**  
 -gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>の脱動詞化 ----->  
**-Case (>> -Det) >> -Pos >> -NB (>> -CL)**  
 -gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>の名詞化 ----->

- (18) oroi      **onta-gs<sup>1</sup>a=s<sup>1</sup>ni**      juu      g-ees<sup>1</sup>e=b.      **(-AGR/+Case/+Pos)**  
 夜遅く      寝る-K.AGT=2SG.POSS      何      という-K.AGT=Q  
 「夜遅く寝てどういうつもりだ (lit. 夜遅く寝る者は何という者だ)」 [Poppe 1960: 67]

- (19) x<sup>1</sup>onoo      **uze-gs<sup>1</sup>e-d**      xedii      bai-g-aa=b.      **(+Valency/+NB)**  
 映画:INDF      見る-K.AGT-PL      いくつ      いる-E-K.IPFV=Q  
 「映画の観客はどれくらいいた？」 [FN]

- (20) buxe      **bar<sup>1</sup>-ald-ags<sup>1</sup>a-d-ood**      sogl-aa      ge-ne.      **(+Voice/+NB)**  
 相撲:INDF      つかむ-RCP-K.AGT-PL-PL      集まる-K.IPFV      という-PRS  
 「相撲取りたちが集まったそうだ」 [FN]

(13)(14) 同様、V-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>が名詞的に用いられている (18) では V-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>が所有人称小詞をともなっている。しかし、これは主語に一致しているとはいえない。仮に主語に一致しているとすると、(18)の文末にも述語人称小詞が続くはずだが、あらわれていない(-AGR/+Pos/+Case)。また (19) のように目的語をとり、また複数接尾辞も接続できる(+Valency/+NB)。さらに (20) から+Voiceであることが確認できる。

なお、(21)右例のように、この「-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>形動詞」は、否定接尾辞 -gui を接続すると「非所有」の意味になってしまい、否定をあらわすことができない。否定を表す際には小詞 bis<sup>1</sup>e を伴う (21)左例のように示す必要が生じる。そのため、-Mood と判断される。

- (21) tere      basgan      **sora-gs<sup>1</sup>a**      bis<sup>1</sup>e.      /      ?tere      basgan      **sora-gs<sup>1</sup>a-gui.**      **(-Mood)**  
 その      娘:NOM      学ぶ-K.AGT      NEG      /      その      娘:NOM      学ぶ-K.AGT-NEG  
 「その娘は学生ではない」      /      「?その娘には学生がいない」

### 3.2 -aas<sup>1</sup>a<sub>4</sub> 行為者 2

同じく行為者をあらわす-aas<sup>1</sup>a<sub>4</sub>は、-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>とは脱動詞化の度合いが異なる。その度合いは (22) のようにあらわされる。

- (22) **-Valency >> -Voice >> -Aspect (>> -Tense) >> -Mood >> -AGR >> -IF**  
 -aas<sup>1</sup>a<sub>4</sub>の脱動詞化 ----->  
**-Case (>> -Det) >> -Pos >> -NB (>> -CL)**  
 -aas<sup>1</sup>a<sub>4</sub>の名詞化 ----->

- (23) **murge-ld-oo<sup>1</sup>s<sup>1</sup>e**      is<sup>1</sup>igen.      **(+Voice)**  
 突く-RCP-K.AGT      子ヤギ  
 「突き合う子ヤギ」 [Poppe: 1960: 67]

- (24) bor<sup>1</sup>-aad      zon      **g-ees<sup>1</sup>e**      xon<sup>1</sup>      s<sup>1</sup>o boon      garbal-tai.....      **(+Case)**  
 ブリヤート      人      という-K.AGT      白鳥      鳥      出自-PROP  
 「ブリヤート人という者は白鳥を祖先とし……」 [山越 2002: 105]

- (25) tam-da ona-z<sup>1</sup>a#bai-g-aas<sup>1</sup>a=haa, (+Valency/+Aspect)  
 地獄-DAT 落ちる-C.IPFV#いる-E-K.AGT=COND  
 「地獄に落ちている者ならば」 [山越 2002: 124 より作例]
- (26) jab-aas<sup>1</sup>a-gui-de. (+Mood/+Case)  
 行く-K.AGT-NEG-DAT  
 「行かない者に」 [Poppe 1960: 68 より作例]
- (27) zor-aas<sup>1</sup>a=mnai zor-aa. (-AGR/+Pos)  
 描く-K.AGT=1PL.POSS 描く-K.IPFV  
 「われわれの（私たちに関係ある）絵描きが描いた」 [Poppe 1960: 68 より作例]

-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub> 同様、-aas<sup>1</sup>a<sub>4</sub> も (27) のように所有人称が主語をあらわさない (-AGR/+Pos)。しかし複数接尾辞を接続することはない (-NB)。また用例がなく判断が難しいが、(25) が与位格名詞を項としていることから Valency を保持していることが推測される (+Valency)。また、(23) のように語幹内部に Voice にかかわる接辞 (+Voice) を、(25) のように Aspect にかかわる表現 (+Aspect) をそれぞれとりうる。さらに (26) のように否定接尾辞-gui を接続することができる (+Mood)。

以上、2種の「行為者形動詞」の脱動詞化と名詞化の度合いをみると、-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>のほうがより「名詞化」が進んでおり、それに対し-aas<sup>1</sup>a<sub>4</sub>は主語との一致がない (-AGR) という点で「典型的形動詞」よりも脱動詞化が進んでいるが、概ね「典型的形動詞」と同じ機能を有するとみていい。

ところで、近隣のサハ語にも-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>によく似た、行為者名詞を派生する接辞(-(EE)čči<sup>8</sup>)がある。Vinokurova (2005)はこの接辞を「統語的名詞化 (syntactic nominalization)」とし、「語彙的名詞化 (lexical nominalization)」と区別した。江畑 (2011)はMalchukov (2006)の階層を用いてその機能的特徴について検証し、形動詞と語彙的派生名詞の中間的位置にこの統語的派生名詞が位置づけられると述べた。江畑 (2011)によれば、サハ語の-(EE)ččiの脱動詞化の程度は(28)のように示されている。

- (28) -Valency >> -Voice >> -Aspect >> -Tense >> -Mood >> -AGR >> -IF  
 -(EE)ččiの脱動詞化 -----><sup>9</sup>  
 [江畑 2011: 126 をもとに本稿の表示方法に改変]

この脱動詞化の度合いは、シネヘン・ブリヤート語の-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>によく似ている。このような点から、シネヘン・ブリヤート語の-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>についても「形動詞」という動詞の屈折カテゴリーに

<sup>8</sup> 江畑 (2011) による表記。Vinokurova (2005) では-AAccY と表記されている。なお、この接尾辞はモンゴル系言語の\*-gači からの借用とされている (江畑 p.c.)。ブリヤート語-aas<sup>1</sup>a<sub>4</sub>も\*-gači に由来する接尾辞である。

<sup>9</sup> 江畑 (2011) によると、-(EE)ččiは Aspect を保持する。多回性をあらわす接尾辞を含む語幹に後続しうることがその根拠となっている。シネヘン・ブリヤート語の-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>も同様に多回性をあらわす接尾辞に後続することが予測される。しかしブリヤート語において「多回性」をあらわす接尾辞を広義の Aspect に含めてよいかどうか検討する必要があり、かつ同じ位置にあらわれる完了をあらわす接尾辞-s<sup>1</sup>x<sup>1</sup>o-に-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>が後続できない。このことから-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>についてはひとまず Aspect より右の特徴を保持しないと考える。



含めるよりも、「統語的派生」をおこなう派生接尾辞と考えるのが妥当と考える。

一方-aas<sup>1</sup>a<sub>4</sub>は、-gs<sup>1</sup>a<sub>3</sub>に比べると脱動詞化・名詞化ともに「典型的形動詞」のそれに近い。

### 3.3 -aŋxai<sub>3</sub> 結果

-aŋxai<sub>3</sub>は動作の結果状態を示すとされる (30)(31) (+Aspect)。遠過去とする先行記述もあるが、少なくとも名詞修飾用法・名詞句用法では Tense は示されない。叙述用法についてもなお分析が必要である。この-aŋxai<sub>3</sub>は否定接尾辞、複数接尾辞をとることができない (-Mood/-NB)。その他の機能も併せると (29) のようにあらわされる。

(29)	-Valency >> -Voice >> -Aspect (>> -Tense) >> -Mood >> -AGR >> -IF
-aŋxai <sub>3</sub> の脱動詞化	-----> ?
	-Case (>> -Det) >> -Pos >> -NB (>> -CL)
-aŋxai <sub>3</sub> の名詞化	----->?

なお、名詞修飾用法・名詞句用法では主語は主格ではなく属格でしかあらわれない (31)。このときに後続する所有人称小詞については、+AGR か+Pos かの判断がつかかねるが、先行する属格名詞との一致ということで+Pos とみてよいと思われる。ちなみに「典型的形動詞」は属格名詞も主格名詞も取ることが可能である。なお、(31) では主語として機能しているため、+Case と判断できる。

(30)	jaa-han	es-eŋxei	s <sup>1</sup> aaxai-tai=s <sup>1</sup> .	(+Aspect)
	どうする-K.PFV	疲れる-K.RSL	靴-PROP=2SG	
	「なんてぼろぼろの靴を履いてるの？」 [FN]			

(31)	xul-ei	xəl-aŋxai=n	ubed-ne.	(+Aspect/Valency?/+AGR or +Pos?/+Case)
	足-GEN	まめになる-K.RSL=3:POSS	痛む-PRS	
	「足のまめ (lit. 足のまめになったの) が痛い」 [Poppe 1960: 64 より作例]			

ただし、この-aŋxai<sub>3</sub>には若干問題も残る。名詞句用法・名詞修飾用法において、明確に主語以外の Valency を保持しているとみなせる例が収集されていない。「典型的形動詞」であれば、(32) のように主語以外の項も句内部に含まれるのだが、そのような例が（現時点では）見当たらない。

(32)	ter-ii=s <sup>1</sup> ni	ger-t-ee	or-ool-xa-da=n...
	それ-ACC=2SG:POSS	家-DAT-REFL	入る-CAUS-K.FUT-DAT=3:POSS
	「彼を自宅に招いたところ...」 [山越 2002: 121]		

もし (32) に類するような例がないとしたら、Valency が消失しているということになるかもしれない。Aspect については「動作の結果」ではなく、単に「状態」を示す形容詞を形成しているとも考えることもできるため、「語彙的派生接尾辞<sup>10</sup>」である可能性も残る。今後より詳細に分析する必要がある。

<sup>10</sup> 江畑 (2011) では、もとの品詞の機能範疇をある程度残しているものを「統語的派生」、もとの品詞の機能範疇を失っている、いわゆる「派生」を「語彙的派生」として区別している。本稿もその区別に従い、通常の派生を「語彙的派生」とあらわす。北米言語に典型的にみられる、接辞それ自体が語彙的な意味をもつ「語彙的接辞」とは異なる。

### 3.4 -aatai<sub>4</sub> 受動

-aatai<sub>4</sub> は受動をあらわすとされる。たしかにもっぱら他動詞に接続し、他動詞目的語に相当する名詞句が主語となることから、受動とみなすこともできる。しかし、動作の結果状態をあらわす形容詞ともとらえられる。ひとまず、V-aatai<sub>4</sub> が保持・獲得している機能範疇は (33) のようにあらわされる。

(33)                    -Valency >> -Voice >> -Aspect (>> -Tense) >> -Mood >> -AGR >> -IF  
 -aatai<sub>3</sub> の脱動詞化-->    ?                    ?                    ?  
                              -Case (>> -Det) >> -Pos >> -NB (>> -CL)  
 -aatai<sub>3</sub> の名詞化        ----->?

(34)    nɔxɔi        oj-aatai=go.                    /    nɔxɔi        oj-aatai-da=s<sup>j</sup>ni                    (-AGR/+Case/+Pos)  
       犬:NOM      つなぐ-K.PASS=Q                    /    犬:NOM      つなぐ-K.PASS-DAT=2SG  
       「犬はつながれてる？」                    /    「お前のところの犬のつながれたやつに」 [FN]

(35)    nɔxɔi        oj-aatai.                    /    nɔxɔi        oj-aa-gui.                    (-Mood)  
       犬:NOM      つなぐ-K.PASS                    /    犬:NOM      つなぐ-K.IPFV-NEG  
       「犬がつながれている」                    /    「犬がつながれていない」 [FN]

まず、(34) から主語と一致せず、人称マーカが所有者を示す(-AGR/+Pos) こと、格接尾辞を接続しうること (+Case) がわかる。しかし一方で、(35) にみるように-aatai<sub>4</sub> は否定接尾辞を直接接続することができない (-Mood)。

なお、この (35) にある否定文と肯定文の対応は、所有をあらわす接尾辞 -tai を使った表現形式 (36) と同一である。-aatai<sub>4</sub> は、構造としては「形動詞」不完了-aa<sub>4</sub> に所有形容詞派生接尾辞-tai<sub>3</sub> が接続したものと考えられている。(36) のように所有形容詞 [名詞-tai<sub>3</sub>] の否定形が [名詞-gui] である。-aatai<sub>4</sub>/-aagui<sub>4</sub> が同じふるまいをみせるということで、通時的には [動詞-aatai<sub>4</sub>] は「形動詞」としていったん名詞化した [動詞-aa<sub>4</sub>] に-tai<sub>3</sub> が接続し、所有形容詞化したものではないかと考えられる。

(36)    xuuged-tei=gu.                    /    xuuged-gui=ee.  
       子ども-PROP=Q                    /    子ども-NEG=SGP  
       「子どもはいるのか？」                    /    「いねえよ」 [FN]

また、-aatai<sub>4</sub> は相互態や使役態接尾辞を語幹に内包した例もない。Aspect についても非関与的と思われる。とすると、すでに脱動詞化が完了し (動詞の語彙的意味のみ保持し)、形容詞化しているとみることできる。

なお (37) のように「位格」を項としてもつようにみられる形式も存在するため、Valency を保持しているとも考えられる。しかし、形容詞も主格以外の格を項とする例 (38) が存在することから、動詞本来の Valency を保持しているかどうかは確定しえない。意味的に主語項があらわれることは考えにくいことから、やはり本来の Valency は消失していると考えられるべきかもしれない。ひとまず (33) では“?” とした。

(37)    saarhan    deer    bis<sup>j</sup>-eetei    bis<sup>j</sup>eg.                    (+Valency?/+Aspect?)  
       紙            上に    書く-K.PASS    文字

「紙の上に書かれた文字」 [Poppe 1960: 64 より作例]

- (38) s<sup>l</sup>ii us<sup>l</sup>ee jamar juumen-de ɔnsɔgi dor-tai=b=s<sup>l</sup>a.  
 2SG:NOM さらに どんな もの-DAT 特に 好み-PROP=Q=2SG

「ほかにどんな趣味がありますか? (lit. 君は他にどんなものに好み持ちか)」

[山越 2006: 159]

### 3.5 小結

以上、「典型的形動詞」の脱動詞化・名詞化とその他4種の脱動詞化・名詞化の度合いを並べると (39)(40) のようになる。

#### (39) 各形式の脱動詞化

	-Valency >> -Voice >> -Aspect (>> -Tense) >> -Mood >> -AGR >> -IF
典型的形動詞	----->
-aas <sup>l</sup> a <sub>4</sub>	----->
-aŋxai <sub>3</sub>	-----> ?
-gs <sup>l</sup> a <sub>3</sub>	----->
-aatai <sub>3</sub>	--> ? ? ?
派生接尾辞	-->

#### (40) 各形式の名詞化

	-Case (>> -Det) >> -Pos >> -NB (>> -CL)
典型的形動詞	----->
-aas <sup>l</sup> a <sub>4</sub>	----->
-aŋxai <sub>3</sub>	----->?
-gs <sup>l</sup> a <sub>3</sub>	----->
-aatai <sub>3</sub>	----->?
派生接尾辞	----->

本節で扱った4種の「形動詞」接尾辞は、名詞化という点では「典型的形動詞」とほぼ同じ状態といえるが、脱動詞化という点では「典型的形動詞」よりもすすんでいる状態にあるといえる。このように Malchukov (2006) の階層を適用することで、従来ひとまとめにくくられてきた「形動詞」の各形式の「動詞らしさ」「名詞らしさ」を明示することが可能となる。そこで得られた (39)(40) からは、これまで「形動詞」とされてきた接尾辞の機能的特徴が一樣ではなく、屈折と派生との間に明確な境界を定めにくいということがみてとれる。

ただし「形動詞」を動詞の屈折ととらえ、「定動詞」「副動詞」と同列のカテゴリーととらえるのであれば、より「脱動詞化」がすすんでいる -aŋxai<sub>3</sub>, -gs<sup>l</sup>a<sub>3</sub>, -aatai<sub>3</sub> は「形動詞」と認めるべきではないだろう。この点で、Vinokurova (2005) や江畑 (2011) が提案する「統語的派生」というカテゴリーが有効となる。典型的形動詞よりも脱動詞化がすすんでいる -aŋxai<sub>3</sub>, -gs<sup>l</sup>a<sub>3</sub> については、統語的派生とするべきであろう。また -aatai<sub>3</sub> はいまだ検討の余地が残されているが、語彙的な派生接尾辞と認めたほうが適切と思われる。

ちなみに西洋言語の視点からは、「形動詞」は verbal noun / participle という「動詞性」の低い術語であらわされている<sup>11</sup>。この点でいえば、-aŋxai<sub>3</sub>, -gs<sup>l</sup>a<sub>3</sub>, -aatai<sub>3</sub> などを「形動詞」に含

<sup>11</sup> 例えば verbal noun について 亀井・河野・千野編 (1996: 1008) は、「目的語をとるような動詞の特徴をもっているものにも、ほとんど名詞的なものにも使われる」と指摘している(下線は筆者による)。また participle (分詞) についても、風間 (2003b: 325) は「印欧語の動名詞や分詞は動詞としての力を大きく失っている」と指摘している。

めるのは妥当な分類といえるということも付け加えておきたい。

#### 4. 「副動詞」との区別

続いて、「形動詞」と「副動詞」とにまたがっている、つまり双方の機能を共有しているとみなされる形式について、その用法を確認していく。

##### 4.1 -xaar<sub>4</sub> 可能性

この-xaar<sub>4</sub>は、Skribnik (2003) では potential participle (‘possibility’) とされる。しかし目的をあらわす従属節を形成する (=動詞修飾用法がある) ことから、Skribnik (2003) 以外の先行記述では副動詞に分類されるか、分析的に形動詞-xa<sub>3</sub>+具格-aar<sub>4</sub>として記述される。一方Skribnik (2003) は (41) のような名詞修飾用法があることをあげて「形動詞」と認め、さらに動詞修飾用法 (42) があることから、「副動詞」にも含めている。

##### (41) -xaar<sub>4</sub> の名詞修飾用法

xen-ei=s<sup>i</sup>e magta-xaar ber<sup>i</sup>.  
誰-GEN=も 褒める-K?.PSBL 嫁

「誰もが褒めるような嫁」 [Skribnik 2003: 115]

##### (42) -xaar<sub>4</sub> の動詞修飾用法

xugz<sup>i</sup>e-hen sojil-ii xurte-xeer horgool<sup>i</sup>-da jab-dag bəl-hən...  
発展する-K.PFV 教養-ACC 受ける-C?.PSBL 学校-DAT 行く-K.HBT なる-K.PFV

「近代的な素養を得るために学校に通うようになった...」 [山越 2002: 119]

なお、動詞修飾用法では主語が主格であられるのに対し、名詞修飾用法では属格でしかあられえない (43)。「典型的形動詞」では (44) のように主語が主格でもあられうる。

(43) \*xen=s<sup>i</sup>e magta-xaar ber<sup>i</sup>.  
誰=も 褒める-K?.PSBL 嫁

[Skribnik 2003: 115 より作例]

(44) tere ber<sup>i</sup>-ii xen=s<sup>i</sup>e magta-dag. / xen=s<sup>i</sup>e magta-dag ber<sup>i</sup>.  
その 嫁-ACC 誰=も 褒める-K.HBT / 誰=も 褒める-K.HBT 嫁

「その嫁を誰もが褒める」 / 「誰もが褒める嫁」

[Skribnik 2003: 115 より作例]

また、否定接尾辞-gui を取ることができず、さらに名詞句用法・叙述用法を持たない。以上のような点から、いわゆる「形動詞」が保持する機能的特徴から逸脱する部分が多い。単に「名詞修飾用法がある」事実のみで「形動詞」として認めるのは若干問題が残る。

##### 4.2 -maar<sub>4</sub> 適性

-maar<sub>4</sub>は、Darbeeva (1997), Skribnik (2003) が「形動詞」として分類している<sup>12</sup>。他の先行記述では派生とみなされることが多い。Skribnik (2003) は -xaar<sub>4</sub>と同じく名詞修飾用法があることを「形動詞」とみなす根拠としている (45)。

<sup>12</sup> 呼称は Skribnik (2003) の qualificational participle (‘suitability’) にならう。

(45) -maar<sub>4</sub> の名詞修飾用法

serig-te **aba-maar** mori-d.  
 軍-DAT 取る-K?.STBL 馬-PL

「軍馬にふさわしい馬 (軍に徴用できる馬)」 [Skribnik 2003: 115]

ただし同時に Skribnik (2003: 115) は、分析的には派生接尾辞-m に具格接尾辞-aar<sub>4</sub> が接続したものであるとし、さらに否定接尾辞-gui を接続せず、否定語 bis<sup>l</sup>e を接続することを次の例 (46) とともに示し、通常の「形動詞」とは異なることを認めている。

(46) **id<sup>l</sup>x<sup>l</sup>e-meer** **bis<sup>l</sup>e** xereg

信じる-K?.STBL NEG こと

「信じがたいこと」 [Skribnik 2003: 115]

また、この形式は-xaar<sub>4</sub> と同じく叙述用法と名詞句用法をもたない。主節述部に用いられる場合は、hana-gda-「思われる (思う-PASS-)」や存在動詞 bai-などが後続する (47)。

(47) -maar<sub>4</sub> の動詞修飾用法

japoon **ɔs<sup>l</sup>-mɔɔr** bai-na=g<sup>s</sup>ʰa.  
 日本 着く-K?.STBL いる-PRS=Q=2SG

「日本に行きたいの?」

ちなみに、近隣のモンゴル語にかんしても、小沢 (1978) は形動詞に分類し、文末 (つまり、主節述部) で用いられる用法 (48) があると認めている。しかし、これも bai-na「いる (いる-PRS)」が省略されているように思われる。また同時に、小沢 (1978:69) は、動詞修飾用法とみなせる例 (49) も提示している。

(48) Mon. -maar<sub>4</sub> の叙述用法? / 存在動詞 bai-の省略?

xarin xəx turuu, jalaa batgan=l xəg niiluule-ŋ doogara-x=n čix  
 しかし 青い 穂 蠅 アブ=だけ 音 併せ-C.CONN 音が出る-K.FUT=3:POSS 耳

**duliir-uul-meer.**

聾になる-CAUS-K?.STBL

「逆に、青い穂と蠅の類が音をあわせてブンブン言うのが耳を聾する程だ」

[小沢 1978: 69]

(49) Mon. -maar<sub>4</sub> の動詞修飾用法?

... baigal-iin baidal xen-ii=č dor setgel-iig **tat-maar** saixan a-žee.  
 自然-GEN 景観 誰-GEN=も 好み 心-ACC 引く-K?.STBL 美しい COP-PST

「自然の景観は誰の好奇心をも引きつけるほど美しかった」 [小沢 1978: 69]

このような点から、-xaar<sub>4</sub> 同様「形動詞」と「副動詞」の中間的な存在といえる。

4.3 「典型的形動詞」の動詞修飾用法

また、1人称所有小詞が後続した例しか確認できていないが、「典型的形動詞」が「副動詞」のような動詞修飾用法 (従属節用法) をもつ例もある (50)。つまり機能的には「副動詞」と

重なるといえる。また、(51) のような例もある。Skribnik (2003: 118) はこうした用法を、(50) に類する形式ではないかと示唆し、山越 (2011: 75) は脱従属化 (insubordination) が起こった例である可能性を指摘している。脱従属文だとすると、(51) も (本来は) 動詞修飾用法であるととらえられる。

- (50) [gansa-x-ijji id<sup>1</sup>-xe=b ge-z<sup>1</sup>e hana-ha]=mni xɔjɔr  
 単一-のもの-ACC 食べる-K.FUT=1SG という-C.IPFV 思う-K.PFV=1SG:POSS 二  
 bai-na=go.  
 ある-PRS=Q

「私は一個だけ食べようと思ったけど二個あるの？」 [Skribnik 2003: 118]

- (51) bii zaabaha sag-t-aa xur-xe=mni.(insubordinate clause?)  
 1SG:NOM 必ず 時間-DAT-REFL 至る-K.FUT=1SG:POSS  
 「私は必ず時間までに到着しないと (いけない)」 [山越 2006: 146]

ちなみに、(38) のように与位格を要求する形容詞が述語となる際に、与位格名詞の位置に形動詞が格接尾辞を伴わずに用いられるケース (52) がある。これは動詞修飾用法とは異なるが、参考として提示する。

- (52) bii ool abir-xa dor-tai=b<sup>1</sup>.  
 1SG:NOM 山 登る-K.FUT 好み-PROP=1SG  
 「私は登山が好きです」 [山越 2006: 159]

- (38) s<sup>1</sup>ii us<sup>1</sup>ee jamar juumen-de ɔnsɔgɔi dor-tai=b<sup>1</sup>a.  
 2SG:NOM さらに どんな もの-DAT 特に 好み-PROP=Q=2SG  
 「ほかにどんな趣味がありますか? (lit. 君は他にどんなものに好み持ちか)」  
 [山越 2006: 159]

-aa<sub>4</sub>, -dag<sub>3</sub> にも類似の用法があるかどうかは未確認だが、(50)(51) をみるかぎり、少なくとも -xa<sub>3</sub>, -han<sub>3</sub> には動詞修飾用法も備わっているといえる。つまり、名詞修飾・叙述・名詞句・動詞修飾用法をもつということになる。ちなみに同様に四つの用法をもつ接尾辞がモンゴル語にもみられる (-maar<sub>4</sub>, -san<sub>4</sub>) ことを風間 (2003b: 327) が指摘している。

#### 4.4 小結：複数の用法をもつ形式の分布

以上、シネヘン・ブリヤート語の「形動詞」のなかには、動詞修飾用法をもつ接尾辞も含まれることを確認した。ところで、このように「形動詞」であるのに動詞修飾用法をもっていたり、その他のカテゴリーに分類される形式が「形動詞」的機能を有したりする例は、他のアルタイ諸言語にも確認される。

風間 (2003: 325-327) はトルコ語 (チュルク語族)・モンゴル語・ナーナイ語 (ツングース語族) および朝鮮語・日本語の動詞形について、それぞれが名詞的機能・副詞的機能・形容詞的機能・文末用法のいずれの機能を担うかを検証し、一覧としている。このなかで、複数の用法をもつ接尾辞として次の表 3 に示す接尾辞があげられている。これにシネヘン・ブリヤート語の「形動詞」をあてはめると次のようにあらわされる (朝鮮語、日本語は除外

した)。

	<i>Tur.</i>	<i>Mon.</i>	<i>Nan.</i>	<i>Shi.</i>
副・名動詞 (動詞修飾・名詞句用法)	-(y)ince <sub>4</sub>			
副・定動詞 (動詞修飾・叙述用法)	-se-人称	-saar <sub>4</sub>		
形・名動詞 (名詞修飾・名詞句用法)	-(y)en <sub>2</sub> -tik/-dik <sub>4</sub>			
形・名・定動詞 (名詞修飾・名詞句・叙述用法)	-(y)ecek <sub>2</sub>	-dag <sub>4</sub> , -x, -aa <sub>4</sub>	-i/-rii/-dii, -xan/-kin	-aas <sup>l</sup> a <sub>4</sub> , (-dag <sub>3</sub> , -aa <sub>4</sub> )
形・定・名・副動詞 (名詞修飾・叙述・名詞句・動詞修飾用法)		-maar <sub>4</sub> , -san <sub>4</sub>		-xa <sub>3</sub> , -han <sub>3</sub> , (-dag <sub>3</sub> , -aa <sub>4</sub> )
形・副動詞 (名詞修飾・動詞修飾用法)				-xaar <sub>4</sub> , -maar <sub>4</sub>

表 3. トルコ語 (*Tur.*)・モンゴル語 (*Mon.*)・ナーナイ語 (*Nan.*)・シネヘン・ブリヤート語 (*Shi.*)における複数の用法をもつ屈折接尾辞一覧

(トルコ語・モンゴル語・ナーナイ語については風間 2003b: 326-327 より抜粋)

「定動詞」「形動詞」「副動詞」という分類がアルタイ諸言語の記述において適しているといわれながらも、機能面からみてその分類にきれいにあてはまるのは、表 3 ではナーナイ語に限られている<sup>13</sup>。トルコ語・モンゴル語・シネヘン・ブリヤート語については「形動詞」(や「副動詞」)の接尾辞それぞれの機能は一樣ではない。

となると、定動詞・形動詞・副動詞という 3 分類はかえって個々の接尾辞の機能を記述する際の妨げとなりうるおそれもある。3 分類ありき、という考え方ではなく、機能的側面から屈折接尾辞をそれぞれ記述していくことが重要ではないだろうか。

## 5. まとめ

以上、「形動詞」という屈折カテゴリーを形成する接尾辞には次のような問題があるといえる。

- A. 従来の「形動詞」は一樣に同じ機能を有しているわけではなく、「派生」～「屈折」の連続性のうちの広い範囲を含んでいる。「屈折」という観点から考えると、従来「形動詞」とされてきた形式の中には「派生」により近い／「派生」と認めるべき形式がある。
- B. 「副動詞」や「定動詞」との対立という点では、重なる特徴を有しているものもある。少なくとも共時的な観察では、「形動詞」「副動詞」「定動詞」という 3 分類におさめることは難しいのではないか。

先行記述の蓄積がある程度ある言語の記述においては、どうしても従来の記述を基層としてしまう傾向がある。アルタイ諸言語は、「アルタイ型」(亀井・河野・千野 1996: 28-29) という術語があらわすように、文法構造が類似しているといわれることから、そのような先入

<sup>13</sup> ツングース諸語については、おおむね「定動詞」=叙述用法、「副動詞」=動詞修飾用法、「形動詞」=名詞修飾用法・名詞句用法・叙述用法というように機能が明確にわけられているようである(風間 p.c.)。

観をもって言語を記述してしまいがちである。しかし 3.5、4.4 で確認したように「形動詞」の機能のある程度厳密に規定し、あらためて動詞屈折の枠組みをとらえなおす必要がある。また「副動詞」と「形動詞」の双方の用法をもつものがあるという事実を考えると、「形動詞」「副動詞」という枠組みをはずし、非定形動詞 (non-finite forms) として記述する方法も可能かもしれない。表 3 に示したように、複数の用法をもつ動詞の屈折形式は他のアルタイ諸語にも確認される。シネヘン・ブリヤート語にかぎらず、アルタイ諸語全般における動詞の屈折を、別の枠組みでとらえることができないか検討してみる必要がある。

### 略号一覧

ABL	奪格	FUT	未来	NOM	主格	PSBL	可能性
ACC	対格	GEN	属格	PASS	受動	RCP	相互
AGT	行為者	HBT	習慣	PERS	人称	REFL	再帰所有
C	副動詞	INDF	不定	PFV	完了	RSL	結果
CAUS	使役	INS	具格	PL	複数	SFP	文末小詞
CONN	接続	IPFV	不完了	POSS	所有者	SG	単数
DAT	与位格	K	形動詞	PROP	所有物	STBL	適性
E	挿入音	NEG	否定	PRS	現在	V>A	動>形派生

### 参考文献

Darbeeveva, A. A.

1997 Buryatskii Jazyk. In: *Jazyki Mira: Mongol'skie jazyki, Tunguso-man'čžurskie jazyki, Japonskii jazyk, Koreiskii jazyk*. 37-51, Moskow, Izdatel'stvo "Indrik."

江畑冬生

2011 「サハ語 (ヤクート語) の統語的派生と脱範疇化」『日本言語学会第 142 回大会予稿集』122-127, 日本言語学会.

Ebata, Fuyuki

2011 Sakha (Yakut). In: Yasuhiro Yamakoshi (ed.) *Grammatical Sketches from the Field*. 179-212, Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa.

Ikegami, Jiro

1959 The Verb Inflection of Orok. 『国語研究』9: 59-73. [再録: 池上二良 2001 『ツングース語研究』24-72, 汲古書院].

亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)

1996 『言語学大辞典第 6 巻: 術語編』三省堂.

栗林均

1992 「ブリヤート語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典第 3 巻: 世界言語編: 下-1』814-827, 三省堂.

風間伸次郎

2003a 『エウエン語: テキストと文法概説』(ツングース言語文化論集 23/環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-030). 大阪学院大学情報学部.

2003b 「アルタイ諸言語の 3 グループ (チュルク、モンゴル、ツングース)、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか: 対照文法の試み」アレキサンダー・ボビン、長田俊樹 (編) 『日本語系統論の現在』249-342, 国際日本文化研究センター.

Malchukov, Andrej L.



- 2006 Constraining nominalization: function/form competition. *Linguistics*. 44(5): 973-1009.
- Nagasaki, Iku  
2011 Kolyma Yukaghir. In: Yasuhiro Yamakoshi (ed.) *Grammatical Sketches from the Field*. 213-256, Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa.
- 小沢重男  
1978 『モンゴル語の話』 大学書林.
- Poppe, Nicholas  
1960 *Buriat Grammar*. Bloomington, Indiana University Press.
- Skribnik, Elena  
2003 Buryat. In: Juha Janhunen (ed.): *The Mongolic Languages*. 102-128, London and New York, Routledge.
- Vinokurova, Nadezhda  
2005 *Lexical Categories and Argument Structure: A Study with Reference to Sakha*. Utrecht, LOT. (電子版 <http://igitur-archive.library.uu.nl/dissertations/2005-0325-013011/full.pdf> [2012年1月16日最終閲覧]).
- 山越康裕  
2002 「シネヘン・ブリヤート語テキスト」津曲敏郎 (編)『環北太平洋の言語』8 (環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究 A2-012): 95-129, 大阪学院大学情報学部.  
2006 「シネヘン・ブリヤート語テキスト: 日常会話を題材にした基本文例集」津曲敏郎 (編)『環北太平洋の言語』13: 139-180, 北海道大学大学院文学研究科.  
2011 「シネヘン・ブリヤート語の人称所有小詞」北方言語ネットワーク (編)『北方言語研究』1. 63-78, 北海道大学大学院文学研究科.
- Yamakoshi, Yasuhiro  
2011 Shinekhen Buryat. In: Yasuhiro Yamakoshi (ed.) *Grammatical Sketches from the Field*. 137-178, Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa.

## “Participles” in Shinekhen Buryat

Yasuhiro YAMAKOSHI  
Sapporo Gakuin University

This paper aims to examine the function of “participles” (also known as “verbal nouns”) in Shinekhen Buryat, which belongs to the Mongolic language family.

In the Altaic linguistics, verbal inflections are classified into three inflectional categories. 1) Finite forms (including indicatives and optatives); 2) converbs; and 3) participles. However, some “participles” seem to be less inflectional than the other “prototypical participles.” Therefore, by using Malchukov’s (2006) functional hierarchy of recategorization, we examine the situation of the decategorization (deverbalization) and recategorization (nominalization) of each of the “participles.”

Furthermore, we will see that it is very difficult to classify some inflectional

forms into “participles” or “converbs,” since such forms have both participial (modifying nouns) and converbial functions (modifying verbs).

In conclusion, I will suggest the following two points:

- a) We can recognize some of the “participles,” which are more deverbalized than the “prototypical participles,” as the deverbal nominals rather than verbal inflections.
- b) In Shinekhen Buryat, we can not simply classify all the inflectional forms into three categories (finite forms, converbs, and participles). It does not seem to be suitable to classify non-finite forms into participles and converbs. We should reconsider the verbal inflections of the Altaic languages in a new framework.